

英語読本に育まれた明治の文学精神 1

川戸道昭

序章 英語教科書の果たした役割

明治期の西洋文学の受容の流れを通覧して、まず第一に目につく特徴は、それが当時の学校教育と切っても切れない関係にあったということである。明治時代、とくにその前半において、中等・高等の学校教育の場はそこを通して西洋文学が日本の社会に受け入れられる最大の窓口となっていた。当時発表された文学作品の多くは、翻訳であれ、創作であれ、作者がかつて高等学校や大学の教場において学んだ事柄となんらかのかたちでつながっていた。たとえば、日本における新しい詩歌の興隆に大きな影響を及ぼした『新体詩抄』もその例外ではない。明治十五年八月に井上哲次郎、矢田部良吉、外山正一によって世に問われた、この西洋の翻訳詩を中心とする新しい詩歌集は、もとをたどれば東京開成学校におけるお雇い外国人教師ジェイムズ・サマーズの英文学講義に源を発する。当時東京開成学校が発行していた英文の『年報』をみると、サマーズが開成学校で講じたのはシェイクスピアの『ハムレット』やトマス・グレイの『墳上感懐の詩』、ロングフェローの『人生の歌』などであったことがわかるが、それらの作品と『新体詩抄』に取り上げられた作品

の一致をみれば、サマーズの講義がそれを聴講した井上らの新しい詩歌創造に与えた影響がいかに大きかったかが推察できるのである。^①

当時の学校教育が日本の土壌に欧米文学を移植する上で果たした役割の大きさは、その頃大学や高校で使用された教科書をも容易に推測されることである。たとえば明治十年代に東京大学で使用された訳読用の英文テキストを例にとつて考えてみると、東京大学では、学生の急激な増加に対処するためか、自校で用いる訳読用の英文テキストの刊行に着手した。その中心には同校で英語の授業を受けもつていた外山正一がいたと思われるが、洋書の入手が極端に困難な時代とあって、これらのテキストは東京大学ばかりか、同じ時期に開校された東京専門学校などのテキストにも採用されていた。それが刊行されたのは明治十年から十七年までの八年間であったが、その間に発行されたテキストは全部あわせて十四、五冊。具体的な昨品名をあげると、マコーレーの『ミルトン』、『ワレン・ヘイスティングズ』、『クライヴ』、シェイクスピアの『ヴェニスの人』、『サミュエル・ジョンソンの『ラセラス』』というような作品であった。これらのテキストは東京大学の刊行が終了する明治十七年以降、三省堂や開新堂といった当時の出版書店から翻刻され全国津々浦々の学校に普及していく。その影響がいかに大きなものであったかを知るには、それらの英語テキストと一般書店から刊行されたテ

キストのリストを照合してみるのが最もわかりやすい方法であろう。東京大学で発行された英語テキストは、いずれも全国各地の出版社から何種類もの翻刻書が刊行され、明治期の屈指のベストセラーとなっていたものばかりであった。^③

もうひとつ、西洋の文学を日本の風土に移植するのに大変大きな貢献をしたと思われる教科書に、「ナシヨナル」や「スウイントン」などの英語読本がある。東京大学出版の英語テキストが尋常中学校の上級から大学までの幅広い年齢層の学生に用いられたのに対し、こちらの方は高等小学校から尋常中学校にかけての比較的低い年齢層の生徒の間に普及していった。これから英語を学ぼうという小学校の児童生徒のほとんどが手にした本というだけあって、その普及の度合いには目を見張るものがあつた。われわれは、明治期最大のベストセラーといわれる中村正直の『西国立志編』の売り上げ総数が合計百万部にも達したということをよく耳にするが、「ナシヨナル・リーダー」を初めとする英語読本の販売部数も、翻刻書の数や重ねた版の多さからみて、『西国立志編』の売れ行きにも決して劣ないものがあつたと推測される。注目すべきは、これらの英語読本が欧米の物語や詩歌を満載する文学作品の宝庫であつたということである。教科書という性質上、そこに掲載されているのは小説にしても詩にしても短編や抜粋がほとんどであるが、内容的には、シェイクスピアあり、スコットあり、ポーあり、マーク・トウェインあ

りで、日本の若者の心に文学趣味を吹き込むには願つてもない媒体となつていた。^③

しかし、従来の研究においては、日本に欧米文学を移植する上でかくも重要な役割を果たした英語教科書に対して、ほとんど注意が払われてこなかったのが実情である。それは従来の研究があまりにも翻訳作品を通しての間接的な受容にとられすぎたことと無関係ではない。いま、仮に、西洋文学の受容史研究というものを、ある欧米の作品が、受け入れられ、吸収され、さらにそこから新たな文学作品が紡ぎ出されるまでの一連の経過を扱う研究であるとするならば、われわれがこれまでやってきたことは、その後半部分、すなわち翻訳や創作という目に見えるかたちで結果が現れている部分の考察のみに限定され過ぎたきらいがある。出口ばかりを注視して、入り口の見きわめがおろそかであつたために、新しい文学や知識が吸収される際の重要ななかだちの一つであつた当時の英語教科書のことを見落とす結果になつてしまったのである。

本稿では、そうした従来の取り組みが必ずしも十分とはいえないかつた当時の英語教科書に光を当てて、それが担つた歴史上の意義を、実際にそうした英語教科書をとおして西洋文学を学んだ人々の証言をもとに、検証し直してみることにする。

そこでまずは、明治の学生たちが、英語教科書を通してどのような文学作品に親しんでいたのか、そのことを確認するために、一つ参考となる文章を掲げてみよう。次に引用するのは、明治から昭和にかけて日本のジャーナリズム界をリードした長谷川如是閑の『ある心の自叙伝』という書物の一節である。そこで如是閑は、英語読本をおしてはじめて西洋の文学作品にふれたときの感想を次のように語っている。

《しかし……ユニオンリーダーその他のリーダーも、本そのものは日本の読本のように親しみのもたれないものではなかった。主にアンデルセンやグリムなどの古典的の童話で、子供の心に訴えるものがあつた。(二々作家の名前があつて、不明なのは「アンノイマス」とあつた。)これもアンデルセンのだった、冬の夜にマッチ売りの少女が寒さと飢えとにふるえながら、家の庇合に野宿して、壁にマッチを擦つて、その燐光の輪のなかに湯気の立つ七面鳥の丸焼きや、母の顔や、あこがれているさまさまの幻をみた、夜が明けるとそこに雪に埋もれた少女の凍死体があつた。というような話に、教場で泣かされた。そうかと思うと、「イサベラ・エンド・アイ」という、少年少女の淡い恋をうたつた詩などがある。……このような悲しい話や甘い話やユーモラスの話が、多くの子供の一生にどう響いたか、十人十色だろうが、日本の読本のように、その逆に行こ

うとする無意識の反抗を誘うようなものでなかっただけはたしかである。》

如是閑は明治八年の生まれで、「十二歳で中学程度の学校に入」つたということだから、彼が英語読本を読んだのは明治二十一、二年の頃であつたと思われる。その当時すでに日本の学童はアンデルセンのマッチ売りの悲話に小さな胸をうずかせていたというのである。これには外国児童文学の移入史に多少なりとも興味を懐くものならば、驚きを禁じ得ないのではないか。それというのも、これまでの研究では、日本におけるアンデルセンの紹介は「不思議の新衣裳」の紹介にはじまるというのが常識となっていたためである。たとえば、岩波文庫の『日本児童文学名作集』(一九九四年二月)に付された桑原三郎氏の解説には、明治二十一年二月に『女学雑誌』に掲載された「不思議の新衣裳」が日本における「アンデルセン童話の始めての紹介」であつたと記されている。「マッチ売りの少女」というのは、それよりも何年も遅れて、本格的に日本の読者に紹介されるのは明治三十五年の平尾不孤が手がけた『マッチ売りの小娘』あたりからということになっている。しかし、実際には平尾訳を遡ること十五年も以前に子どもたちはすでにこの世界の名作に親しんでいたというのである。早速、事実のほどを確かめるべく、手もとの英語読本を調べてみたところ、たしかに如是閑の言うとおりであつた。「マ

ツチ売りの少女』は『ナショナル 第三読本』に、そして「イザベラ・アンド・アイ」と題する少年少女の淡い恋物語は『スウィント 第四読本』に載っている。当時最も広く世に行われていた英語読本に載っていたとなると、当然その「直訳本」なども多数出回っていたはずで、本作品が読みはじめられた時期はもちろんのこと、その本邦初訳の年に関しても変更を余儀なくされることになる。

変更を迫られるのは単に個々の作家の作品受け入れ年表ばかりではない。もっと根本的な、これまでわれわれが西欧文学の受容史研究において採用してきた方法や考え方そのものを再検討する必要があると生じてくるのである。

従来西洋文学の受容史研究というと、きまって翻訳や翻案あるいはその作品の紹介文献を中心に考察が進められてきたが、本来外国文学の受容というのは翻訳や翻案作品を通じた間接的な受け入れより先に、原書を通しての直接的な受け入れというものが存在したはずである。しかし従来の研究では、翻訳や翻案作品の出版の流れを追うことに神経を傾注するあまり、原書を通してのダイレクトな受け入れのほうにはほとんど関心を向けてこなかったのが実状である。たとえばアンデルセンを例にとれば、これまでわれわれがやってきたことは、「日本のアンデルセン」というような標題の下に、アンデルセンの作品が、翻訳や翻案、あるいは創作と結び付けられていく状況を辿ることにエネルギーのほとんどが費やされてきた。しかし、

それは日本におけるアンデルセンの受容ということからすれば、むしろ二次的な受容経過の検証で、一義的、そしてはるかに本質的なアンデルセンの受容というのは、原文ないしはその他のヨーロッパ言語訳をなかだちとする受容のほうである。この中心となる流れを押しさえずに、翻訳や翻案を手段とした間接的な受容の流ればかりに目を向けてきたために、われわれはアンデルセンの受容の本筋を見誤る結果になってしまったのではないか。

そのような観点から再度「ナショナル・リーダー」の内容を検討し直すと、そこに収録されているのは単に「マッチ売りの少女」ばかりではない。アンデルセンの作品の中でも、日本で最初の翻訳とされる「王様の新衣装」に関しても、同じようにその英訳が『ナショナル第五読本』に掲げられている。アメリカにおける『ナショナル第五読本』の版權取得は一八八四（明治十七）年となっており、一八八七（明治二十年）には日本で最初の翻刻書が刊行されているから、やはりこの作品も翻訳が出回る以前に、英語読本を通じた直接的な受容の流れが存在したことを考える必要が生じてくる。

このように、英語読本を媒体とするアンデルセンの受容ということに光を当ててその起源をたどっていくならば、日本におけるアンデルセンの受け入れの始まりは明治七、八年の東京開成学校にまでさかのぼる。そこで広く全校生徒の間に用いられていた「スタンダード・リーディング・ブックス」という『英語読本』『第一読本』か

ら『第五読本』まで存在には、「マッチ売りの少女」や「みにくいアヒルの子をはじめとするアンデルセン童話四話が掲載されている。アンデルセン以外にも、グリムやペロー、ホーソーンなどの童話が多数掲載されており、そのテキストが教室で読まれたという確かな証拠が残されているところから、それが日本の生徒が西洋児童文学の名作にふれた最も早い段階のものであったことは間違いない。とくに、それらの名作を教場でひもじいたのが明日の日本を支える若きエリートたちであったことを考えると、東京開成学校における「スタンダード・リーディング・ブックス」の採用は近代児童文学史上の画期的出来事であったと思われるが、そのことに注目する児童文学史家はいない。日本の読者がグリムやアンデルセンなどの世界童話にはじめて接する機会を提供したテキストとして、われわれは、この英国チェンバーズ社 (W & R Chambers) から発行された英語テキストに、もっと大きな関心を寄せてみなければならないだろう。³⁾

二 永井荷風「歓楽」

このように、英語教科書による欧米文学の受け入れという視点は、従来の研究にはまったく欠落していた視点であり、それがアンデルセンの受容にかぎらず明治期の欧米文学全体の受容の実態を大きくゆがめてしまっていることをわれわれは銘記する必要がある。現在の英語教科書に与えられた役割などから類推して、それが明治の欧

米文学の受容の流れに与えた影響など高が知れていると考える人もいるかもしれないが、それは違う。真の欧米文学に接する機会がほとんどなかった当時の時代状況を考えるならば、英語教科書というのは、次代を担う若者の多くがそこから欧米の文学知識を吸収する唯一最大の窓口となっていたといっても過言ではない。感性豊かな明治の若者たちが、英語教科書を通して吹き込んでくる新しい文学や思想のいぶきにどれほどの感化を受けていたか、永井荷風の「歓楽」という小説中にある次の一節がそのことを端的に物語っている。

《先生は云ふ。そもく、物心づいてから今日まで、私の生涯には恋愛と文芸と、この二ツより外には何物もなかったと云つてよい。恋愛は無論、智識の力をかりず独立した肉情から発生する事は云ふまでもない事であるが、然し私にして若し、中学校の教科書として、ラムの沙翁物語や、アービングのスケッチブック（其の中の殊にブローケン、ハアトの如き）を読まず、又暑中休暇や日曜日を近松の浄瑠璃や徳川末代の戯作の閲覧に費やさなかつたら、私は確かにあんな感情の早熟を見はしなかつたらと思う。》
（歓楽）『永井荷風集』明治文学全集73〔筑摩書房、一九六九年〕一四七頁

これを見てもわかるように明治の中頃に中学時代を送った人々に

とって、英語の教科書というのは彼らを眞の文学へと誘う最も重要な要素の一つとなっていた。そのことを裏づけるべく、わたしはかつて明治期に刊行された英語副読本の著者別一覧表を作成してみたことがある。その内容の概略を記すと、著者名の記載のないものやアンソロジーを除く英語副読本の数はおおよそ三百点、そのほとんどがシェイクスピアやデイクンズ、カーライルといった著名な文学者たちの作品である。ここに言及されるラムの『沙翁物語』やアービングの『スケッチ・ブック』ももちろんそこには含まれている。いずれも明治期の学生にその名の知られた著名な教科書であり、『沙翁物語』の最も早い出版例は明治十九年、同じく『スケッチ・ブック』は明治二十年、それ以降、前者は四点、後者は八点と、それぞれ異なる出版社の手によって刊行が重ねられていった。とりわけ『スケッチ・ブック』の人氣は高く、たとえば手もとの有斐閣版の奥付をみると、明治二十八年の一月の初版以来、明治三十七年二月までの九年間に十一回版を重ねたとある。

「ブローケン・ハート」という一篇は、アイルランドの騒乱の折、反逆罪で処刑された若き志士の妻が、夫を慕うあまりいつまでもその面影を忘れられず、失意と悲しみのうちにこの世をあとにしている様子を、作者のアーヴィングが（時に恋の情火は人をして失意の死に至らしめることさえある）という己の信念を示す例証として語っているものである。アーヴィングが生涯独身を貫いた秘密に迫る

一つの鍵とも目される一篇で、これが荷風の「歓楽」における主人公の恋愛観にも少なからず影響を投げかけていることは次の一節をみても明らかである。すなわち、主人公の十六歳の折の回想にわく、「私は日夜病床に付添ふ看護婦に対して、此れまで父母の傍に生きてゐた時覚えた事のない感情を知り初めた。私は直ちに読書から得た想像で、此の新奇な感情が恋と云ふものである事を意識すると、私は苦しいほどに嬉しく思つたと同時に、恋は必ず不幸で悲惨であるやうに書いてある読書の経験から、云ふに云はれぬ悲愁に襲われた」と。

この四十歳を越えた文壇大家の主人公が回想する若き日の恋愛観には、アーヴィングの「ブローケン・ハート」の与えた影響の跡がはつきりとみてとれる。一方で、驚くほどに「早熟」な恋愛感情の芽生えを促すきっかけとなった中学校の教科書が、その一方で、「恋は必ず不幸」に終わるといふなんとも堪えがたい「悲愁」を心に植えつける原因ともなった。「物心づいてから今日まで、私の生涯には恋愛と文芸と、この二ツより外には何物もなかつた」といひきる主人公にとって、その精神形成に与えた影響力ははかりしれないものがあつたとみななければならないだろう。それは単に一篇の小説の中の出来事ということにとどまらない。「歓楽」という作品は、前にも述べたとおり、荷風自身の生活体験をもとにして書かれた箇所が少なくない作品である。実際、荷風はここにあるように、明治二十七

年の暮、すなわち数え年十六歳のときにルイレキを患治療するために、下谷の大病院に入院している『日本近代文学大事典 机上版』講談社一九八四年一〇月。そうした、主人公と荷風自身の距離の近さを考えるならば、「ブローケン・ハート」に代表される中学時代の英語教科書は背後に存在する荷風自身の恋愛観にも少なからぬ影響を与えていると考えるのが筋だろう。

もし仮に、主人公（＝荷風）が、それを英語の教科書の中の一編としてではなくて、日本の翻訳や翻案によつて読んだとしたならばどうだろう。彼は、「あんな感情の早熟を見るまでに文学上の感化を受けることになっただろうか。明治二十年代の翻訳文学界の混迷ぶりをみると、どうも否定的な意見に傾かざるをえない。当時の欧米文学の翻訳には訳者個人の趣味や意見、あるいは政治的、宗教的、道徳的意図が入り込む余地がありすぎた。「意識」「纂訳」「摹倣訳」といったその頃の翻訳に冠せられる名称がなによりもよくそのことを示している。

それを支える文章もまたしかりである。その頃の文学者の大半は、いまだ、西洋の文学作品にみられる「精緻の思想」を写し取るだけの日本語を身につけていなかった。坪内逍遙の言葉を借りるならば、「和漢洋三文体の帰一策は美文学翻訳の盛んなる最中に於て定まらん」（『早稲田文学』第三号）というように、翻訳文学が盛んになってそこから自ずと日本の文章に方向が見出されていくのをまつという

状況にあった。このような事実には照らしてみるならば、当時、西洋文学の本質をもつともよく伝えることができた書物というのは、意外にも、日本の作家の言葉を介した翻訳文学書ではなくて、中学校や高等中学校で使われていた英語教科書であったということがはっきりしてくる。永井荷風の「歓楽」はそのことをわれわれに教えてくれる貴重な文献の一つということができるのである。⁵⁾

（次号に続く）

（1） 東京開成学校におけるサマーズの英文学講義については、拙稿「西欧文学との出会い——ジェイムズ・サマーズと東京開成学校の英文学講義——」（『ヴェルヌ集Ⅱ』明治翻訳文学全集〈新聞雑誌編〉28巻（大空社、一九九七年一〇月）参照。

（2） 東京大学から刊行された英語教科書については、拙稿「明治時代の英語副読本（Ⅰ）」『英学史研究』第27号（日本英学史学会、一九九四年一〇月）、同じく「明治時代の英語副読本（Ⅱ）」——外山正一と東京大学刊行英語テキスト——『英学史研究』第30号（日本英学史学会、一九九七年一〇月）参照。

（3） 明治期の英語読本に掲載された文学作品の具体的作品名に関しては、拙稿「英語読本に掲載された主要欧米文学作品一覧」『シェイクスピア集Ⅱ』明治翻訳文学全集〈新聞雑誌編〉2巻（大空社、一九九六年一〇月）参照。なお、本稿はそこに併載された拙稿「欧米文学の移入経路としての学校教育——英語読本に育まれた明治の文学精神——」の一部を修正加筆したものである。

(4) チェンバーズ社の *STANDARD READING BOOKS* が果たした児童文学史上の役割については、拙稿「明治のアンデルセン——出会いから翻訳作品の出現まで——」、『明治期アンデルセン童話翻訳集成』第5巻（ナダ出版センター、一九九九年一月）、同じく「グリム童話の発見——日本における近代児童文学の出発点——」、『日本におけるグリム童話翻訳書誌』（ナダ出版センター、二〇〇〇年七月）参照。

(5) 日本におけるワシントン・アーヴィングの受容については、木村毅著『日米文学交流史の研究』（恒文社、一九八二年六月）の中の「二人の読者（阿部磯雄と永井荷風）」という文章が資料的に充実している。拙稿もそれに負うところが大きい。

（かわとみちあき 中央大学教授）